

第二の  
黒船襲来

負けるな、  
諸君！

青山 猛 *Aoyama Takeshi*

文芸社



# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF\\_is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

第二の  
黒船襲来

負けるな、  
諸君！

青山 猛 *Aoyama Takeshi*

文芸社





## 本書の目的

今を去る10年前の1995年に、「第2の黒船」が襲来した。

それは、「グローバル経済」という、我々が経験したことがない外敵である。

それからの日本は、何もかも大きく変わってしまった。諸君は、それを、どれほど自覚し、気づいているだろうか。

それは眼に見えない敵である。

それまでこの日本にあった、さまざまな価値観をすべて否定し、我々を襲っている。

チャンスがあれば、知らぬ間に自分が自滅している、という危機が存在している。

一人で何百億円もの財を獲得する人もいれば、浮かばれないでいる人もたくさんいる。

悲運だと思っている。

しかし、それは違う。

このような中にも、それぞれに歩むべき道がある。自分の願望にかなう道がある。

「黒船」に立ち向かっていくための「資質」を獲得すれば、楽しい未来があるのである。

本書は、「自分を見つめ直し」「道を見出し」そして「生きがいを得る」ための「本質を

与えたい」と願って執筆した。新しい時代に対応できる自分を発見していただきたいと願って記述した。

しかし、それは「即効薬」ではない。

安易な可能性を示して現状からの脱出を促したり、刺激的な言葉をつらねて成功のプロセスを紹介するものでもない。

むしろ逆で、現状をよく見詰め直し、原点から「自分の力を育てる」ことから確実に自分を見出す方法について述べたいと思っている。筆者の長年の実務経験と、多くの方々の示唆をもとに、「変革はどうしたら乗り切れるか」について記述した。

グローバル経済といわれるこの時代は、世界中のさまざまなことが絡み合っただけで急速な勢いで変化している。

とても一人で道を歩み続けることはむずかしい。

人と人との交流で得られるアドバイスや、世の中からのアンサー（返答）をいただきながら行動することで、初めて「正解」は得られるのである。

本書はこのように、「人に会い」「力を蓄えて」「出口を見出し」そして自分で「行動する」ことが本質的な人生の「解」であることを説いている。

それは今まで自分が考えていた挑戦とはまったく異なるものとなるはずである。

それは、「生涯を賭した自分の可能性への挑戦」であり、ビジネスでいえば「自らを大きく改革する起点」となるのである。

また、この「出口を見出す力」は、自己の革新だけでなく、あらゆるものを幸せにする原動力であることも強く訴えている。

今、皆が、自分を見失っている最大の理由は、この「出口が見えない」からである。是非とも「俺は（私は）こうして生きている！」という実感を味わってほしいと願っている。

2005年1月

青山 猛



目次

本書の目的 3

はじめに 17

第一章

第二の黒船襲来（国難きたる）……………

19

第二章

幕末、黒船に立ち向かった若者たち……………

25

1 竜馬のロマン 25

2 立ち向かった若者たち 26

3 自分が目指すものは何だ！ 30

(1) あんたこそ英雄だ！……………桂 小五郎 31

(2) これからの商売は国事じゃ……………岩崎弥太郎 34

(3) 自分は何と卑小なのだ！……………後藤象二郎 36

(4) 新政府役人表に（竜馬の名がない！）……………西郷吉之助 38

第三章

目指す「出口」とは何だ！…………… 41

1 「出口」が見えない！ 43

## 第四章

- 2 さまざまな「出口」 46
- 3 「出口が見えたら」こんなにすばらしい！ 49
- (1) 企業活動などでは 49
- (2) 社会生活では 51
- (3) 人間形成としては 53
- 出口発見のキーワード …………… 58
- 1 ビジネス分野の「キーワード」 59
- (1) 現業にある「新芽」を育てる 59
- (2) ブランド化を目指そう！ 62
- (3) 「仮説」によるマーケットイン 71
- (4) 「収益モデル」で事業を見る 76
- (5) ハイリスク／ハイリターンに挑戦する 79
- (6) 成果主義を生かす 83
- (7) 生きた経済を実感する 88
- 2 社会分野のキーワード 92

## 第五章

- 流れをつかむ！……………
- 1 社会はどう変わる？ 142
    - (1) 地域格差は広がる 142
    - (2) 変わってほしい教育システム 144
    - (3) 専門医が医療を支える 148
    - (4) 食品のブランド化が進む 149
  - 2 ビジネスの流れは？ 151
  - 3 生活分野のキーワード 123
    - (1) がんばれ！フリーター 123
    - (2) プラス思考で生きる 129
    - (3) 今は子供たちが大変！ 133
    - (4) 尊厳をつくる 117
  - (1) 社会の流れはここで決まる！ 92
  - (2) リスクは追ってくる！ 99
  - (3) 仲間と生きる 113
  - (4) 尊厳をつくる 117

第六章

- 切り開く資質とは ……………
- (1) 社会貢献型企業が伸びる 151
  - (2) 伸びる製造業とは 152
  - (3) 付加価値が勝負の「組み立て産業」 153
  - (4) 情報通信は携帯が主流 155
  - (5) 「アセット型」再生事業は発展する 156
- 3 生活や生き甲斐はどう変わる？ 157
- (1) 生活設計はますます厳しい 157
  - (2) フリーターはまだ増える 160
  - (3) 福祉・介護は自分で守るしかない 162
  - (4) 情報活用はイコール「快適生活」 164
- 1 「人が好きだ」 168
- 2 「人への思いやり」 174
- 3 「自然体でのぞむ」 183
- 4 「強い意思」 189

第七章

- 
- (1) 妥協しないこと 191
- (2) 体を現場に持っていく 191
- (3) 責任をとる 192
- (4) 一歩、人をリードする 193
- 5 「中立な判断」 194
- 6 「公平」を正す 198
- 今を戦うすばらしき人たち ……………
- 1 再開発のコンセプトは「儲かる秋葉原」  
——「K先生」 205
- 2 地域活力の事業化に味方して46年  
——民間企画会社代表Hさん 208
- 3 民間の知恵と国の事業をつなぐNPOに奮起  
——元国土交通省局長S氏 210
- 4 行動心理学はニュービジネス  
——コンテンツ提供事業代表F氏 212

## 第八章

- 5 コンピュータービジネスは社会に貢献するもの！  
——ベンチャー企業代表A氏 214
  - 6 内閣府を飛び出した若き獅子  
——政治家を目指すF氏 216
  - 7 財団を熱く見守りたい！  
——某財団I女史 219
  - 8 人を動かしているものは何なのか？ 221
- 行動しよう！ ……………
- 1 積極的に人と交流する 226
    - (1) 関係を発展させる 228
    - (2) 「人物マップ」を携える 229
    - (3) 人と人を結びつける 231
  - 2 営業を革新する 233
    - (1) ブランド型かヒット型か！ 233
    - (2) 客とパートナーになる！ 235

- 
- (3) トップユーザーから攻略しろ！ 238
  - (4) 社内組織を引きずり出せ！ 239
  - (5) ITの力で客を囲い込む 240
- 3 技術研究を見直す 242
    - (1) 事業との結びつきで判断する 243
    - (2) パートナーを探そう！ 245
- 4 企業内自己改革 247
    - (1) 社内ベンチャーで挑め！ 247
    - (2) 「ウロウロアリ」を申し出る！ 249
    - (3) 5つ年上の先輩と付き合う 251
    - (4) 右脳で全体を捉える 253
- 5 先頭に立つ 256
    - (1) 「覚悟」がなければチャンスは来ない 256
    - (2) マネジメントゲームをやれ！ 260
    - (3) マニュアルで業務を改革しよう！ 264
- 6 国の制度を利用する 267

- 
- (1) 事業支援制度の利用 267
- (2) 若者自立・挑戦プラン 269
- (3) 規制緩和への要望 270
- (4) 地域再生事業もチャンス 271
- 7 グループ活動を生かす 273
- (1) どんなグループがある？ 273
- (2) どのようなメリットがあるのか 273
- (3) 成功のパターンは 274
- (4) 成功の秘訣は 275
- 8 先達へのアプローチ 276
- (1) 何のためにアプローチするのか 276
- (2) 先達をよく知る 277
- (3) どのような心がけて臨めばよいのか 278
- (4) 何が得られるのか 278
- 9 生涯設計で活力を得る 279

第九章

女性は強い！ .....

第十章

「欲」と「風土」を考える .....

1 「欲」をはぐくむ「風土」 292

2 日本の「風土」と「国民性」 295

(1) 日本の風土とは？ 295

(2) 日本人の国民性 297

(3) 「欲」(エネルギー)を高める 302

(4) 「風土」との共存 304

第十一章

人生を生きる .....

第十二章

おわりに .....



## はじめに

「人はどのようにして生き、人とはどのように付き合うのか？」

「社会の仕組みにどのように調和すべきなのか？」

「自分なりの生き方はどうしたら見つかるのか？」

「現状を改革する能力はどうしたら得られるのか？」

「第2、第3の『生きがいの場』（職も含めて）をつかむには？」

などなど、人は自分に問い、自分なりの答えを出して頑張っている。

しかしながら、世情の競争は激しく、ついて行けず、次第に方向感覚を麻痺させたり、周りの人々の心の荒廃を感じては、意気消沈しているのが正直な現況なのだ。

何度走つても勝てない競走馬『ハルウララ』のチケットをそれでも買うたくさんの人、懸命に自分に気合いを入れて勝とうと頑張る力士『高見盛』への心温まる声援は、そんな世情を反映しており、我々自身がまだまだ頑張ろうとしている『心意気』なのだ、思わずにはいられない。

社会は人の集うところであり、個々につながりがあって何事も進んでいるのであれば、必ず、そこには「生きる源」も「方法論」も存在しているのである。

筆者は、150年前のこの日本にあった「坂本竜馬と竜馬に逢えた若者たち」の躍動感溢れる行動に、その「源」を見ることができると思っている。

作者、司馬遼太郎氏が提唱する「人生の青春」に触れ、現代の我々の生き方を考えてみたいと思っている。

そして本書は、今を懸命に生きる多くの学生や若者、そしてビジネスマンや中高年の方々に、是非「あなたの近くにいる坂本竜馬」を見出し、自分らしい自分を発見していただきたいと願って、帯に「君は竜馬に会えるか？」と書いた。

また、女性の方々にも、現在の多様化社会を乗り切っていくためには、男性と同じように、多くの人と交わり、「大きなコンセプト」を身につけることが成功の秘訣であることを、いくつかの事例から説明したいと思っている。

はじめに「第九章、女性は強い！」（283頁）からお読みいただき、女性固有の資質を生かして挑戦されることをお勧めしたい。

## 第一章 第二の黒船襲来（国難きたる）

今、我々は「グローバル経済」という黒船に襲われ、日々の生活に、仕事に、お金に、老後に、悩まされている。

ひよつとすると、襲われているという感覚も感じることなく、毎日を追いたてられているのかもしれない。周囲の状況を冷静に知ることができず、右往左往しているのかもしれない。

いまから10年前の、1995年を起点に、何か大きな変化が日本を襲ったことを改めて考えてみる必要がある。

1) 日本の実質経済成長率（名目値）は、それまでの10%前後の成長から、一転してマインナス成長に変わったこと。

2) 国債や借入金など国の債務（借金）残高が、この時点から急激に膨らんだこと。

（9年間で倍以上に膨らみ、703兆となった。国民1人当たりでは約550万円も  
の借金）

3) 完全失業率が、それまで長年、2%台であったものが、1996年から3%台、4%台、そして、現在の5%台と変わってきたこと。

4) 製造業の多くの企業が、製造拠点を海外(東南アジア、とくに中国)に進出したいと考えていること。(2002年、通産省の調査では全企業の7社に1社)という現状なのである。

それでは、1995年とは、どんな年だったのだろうか。

- ・ 1月17日、阪神淡路大震災発生。
- ・ 3月22日、地下鉄サリン事件が、オウム真理教により引き起こされる。
- ・ 米国マイクロソフト社がWindows95を発売。米国の世界戦略が始まる。
- ・ 4月9日、統一地方選挙で、東京都は青島幸男氏が、大阪府は横山ノック氏が知事に当選、いわゆる「無党派」という流行語を作り出した。

筆者は、この年に、「第2の黒船」が日本に現れたのだと思っている。

それまでの日本人の生活観も、仕事の環境も、お金の流れも、ここから変わってきたと考えている。外敵が、ひそかに、見えない形で侵入してきたのである。

幕末の時代にも、欧米列強による経済侵略を目的にした「黒船」が来襲した。

長い封建制度のなかで富を蓄えてきた鎖国日本は、彼らにとつては格好の標的であり、南アジアの国々を争って手中に収めた彼らからすれば、それはたやすいことのように思えたであろう。

しかし、それを察知して防いだのは、日本の南部（九州、四国、中国）の藩政社会の最下部にいたたくさんの下級武士たちであった。

その「高邁な精神」と「脱藩」という先駆的行為により、日本は救われた。

当時の「黒船」は、カミナリのような大砲をとどろかして迫ってくる、眼に見える形での「外圧による侵攻」であった。

多くの日本人が、いま心ひそかに迷い、嘆き悲しんでいることは、見えない敵による「先行きが見えない」という「恐怖」である。世界枠にはめ込まれた日本という「グローバル経済」のなかでさまざま日本の中での、自分という存在のあり方であり、競争の仕方であり、生きがいの発見である。

すなわち、「第2の黒船」という敵は「内圧による自己崩壊」という敵なのである。

政治家も、行政マンも、多くの企業も、また、我々市民も、どのように立ち向かうべき

か、それぞれに悩み、出口を求めて走っている。

しかし、多くの市民やサラリーマン、中小企業の方々、学生やフリーターの諸君は、本当に大変である。いつまで耐えればよいのか分からずに、崩壊寸前の状態なのではないだろうか。

「第2の黒船」という敵はやつかいである。

若者たちの向上心を殺ぎ、精神性を損なう過激な対人競争のリングを作り出して攻勢を掛けている。また、マンネリな政治体制から、何も変わらないという「厭世観」まで押し付けてきている。何が問題の本質で、どこが出口なのかが見えない敵なのである。

筆者は思う。

あの幕末の先人たちが見舞われた状態と、今は全く同じ状況ではないか。

かつて黒船という外圧に立ち向かった下級武士たちは、一人一人が目的を持って、力を合わせて行動した。昼夜を問わず奔走し、情報を確かめ合い、猛進した。

“先を見たい” “このまま埋もれたくない” という若者特有の向上心が、辺境の身を京都や江戸に向けさせた。

当時の若者の “生きるすべ” は、「人が好きになり」「すばらしい師や仲間に出会」「自分

がやりたいことを見つけ」「出口に向かって突っ走る」……であった。

時には突出して、「情勢」利「あらず！」「後をたのむ！」と叫んで切腹して果てた。

それらの中で培われた「時代を読む力」や、「チームワークとしての具体的な実現の可能性」が、彼らの「力強い行動力」をもたらした。

このような先人の偉業のおかげで、日本は大国として歩むことができたのである。

「第2の黒船」に立ち向かう方法も同じである。

我々一人一人の「自己の確立」というひたむきな努力であり、「人との協調」であり、その「つながり」であり、「継続」という力なのだと思う。

一人一人の「思い」が、小さな谷間から潜流となつて滲み出せば、あちこちの沢から同じ「思い」が噴出し、本流となつて国難を克服していくと思つている。

グローバル経済は「世界中の富を再配分する新しい時代」といわれ、情勢が見えにくく、確かに難しいのかもしれない。

流れがあちらこちらでぶつかり合い、渦が発生して舵もとりにくい。

今までと違って「己の生き甲斐」や「改革のあり方」が見つけづらくなつている。

しかし、そのような情勢を「肯定して」立ち向かつてほしいのである。

「計り知れない変化が突然襲ってくる不安な時代」として、背を屈めるようなことは止め

てほしいのである。

いつの時代でもそうであるように、人と人とのつながりは「大きな力の源」である。

それがバックボーンとなり、エンジンとなって勢いよく成功の道を走らせてくれるはずである。卑屈に「小さな成功」の夢を見たり、少しばかりの「勝ち残り」を喜ぶような輩（やから）にはなつてほしくないと思う。

## 第二章 幕末、黒船に立ち向かった若者たち

### 1 竜馬のロマン

永い幕政の眠りから目覚め、欧米列強国による植民地化を憂えて走り回った一人の男「坂本竜馬」への思いはいつまでも我々日本人に多くのことを残してくれと思う。

故・司馬遼太郎氏は、『竜馬がゆく』のあとがきでこのようなことを書き添えている。

「筆者は、この人物を通して、幕末の青春像を書いている。

坂本竜馬を選んだのは、日本史が所有している『青春』のなかで、世界のどの民族の前に出しても充分に共感をよぶに足る青春は、坂本竜馬のそれしかない、という気持ちで書いている」

と、思いを伝えている。

小生が、本書に竜馬を登場させていただいたのは、大局に立ち向かう、この「青春」と、難局を切り開いた「人の輪の力」を強く感じたからである。

特に、この史実に基づく小説では、二つのことが感銘深い。

一つに、当時としては全く考えることもできなかった「薩長を連合させ、さらに土佐を加えれば、国力は統一できる」という「出口を明確に見据えていた」こと、そして、その実現に、「私」を捨て、躊躇なく行動したその「ロマン」である。

二つには、多くの人と交わり、それらの人々の長所を引き出し、それを激流のなかでしっかりとつなぎ止めて「大きな力にしていた」と「そんな「人間としての竜馬の魅力」である。

大政奉還が実り、竜馬は天に昇ったが、そのロマンや刺激を受けた「名もない多くの若者」がその「青春」を受け継ぎ、明治維新を押し進めて行った。これは紛れもない日本の歴史であり、我々の先人の行動だったのである。

現代の我々に、不安な時代を切り開く、何らかの「示唆」を与えてくれていると筆者は信じている。

## 2 立ち向かった若者たち

それらの若者は、今流に言えば、竜馬先生のセミナーを聞きに行ったのではなく、先生

と名刺交換をして知り合ったわけではない。

脱藩という命がけの行爲を行って海援隊や後の亀山社中に集まったのである。生きるべき人生の「場」を求め、噴き出すエネルギーをぶつけていったのである。

▼陸奥陽之助、後の外務大臣として手腕を發揮した。父の失脚という不運にめぐり遭い、脱藩して竜馬に会えた。常に竜馬の片腕として、最後までサポートした。

海援隊で蓄財した500両の大金を「隊士に分配してしまえ！」の竜馬の指示に大いに不満だったが、「これから興すカンパニー（亀山社中）には金より評判が大事」と新時代が来ることを諭され、竜馬の大きさを思った——と言う。

『竜馬がゆく』（5） 335頁

▼桂小五郎（木戸孝允）、長州藩士。ペリー来航の折に藩命で横須賀偵察時に知り合い、盟友関係を結ぶ。しばらく後に藩の尊王運動の旗手となり、蛤御門の後一時身を潜めることになるが、やがて竜馬と結託し、討幕を成し遂げた。

▼中岡慎太郎、土佐藩士。土佐勤王党に参加するも弾圧され、長州へ出奔する。

薩長に手を結ばせるために、竜馬と両輪になって説得にあたる。

大政奉還直前の1867年11月15日近江屋に潜伏する竜馬を訪ね、そこで刺客の襲撃を

受ける。重傷ながらも2日間意識を保つが17日絶命する。

享年30歳。

▼後藤象二郎、土佐藩吉田東洋に見出され、後、藩の高官となり、武市投獄の折には彼を尋問。後に竜馬に近接し倒幕に尽力することとなる。

二条城の会議結果「大樹公（徳川慶喜）、政権を朝廷に帰するの号令を示せり」の第一報を竜馬に伝える。

▼岩崎弥太郎、土佐の牢獄で遠縁（？）の竜馬と初対面する。出牢後にその才を吉田東洋に見出され、土佐藩の幕吏となり竜馬の命を狙うも未遂。やがて商業に目覚め、後藤に登用され、土佐の貿易会社土佐商会設立に参加。後にその組織を「郵便汽船会社」という事業に発展させ、後の三菱財閥の礎を築いた。

▼中島信行、初代衆議院議長を務めた。土佐藩の温厚な青年であったが、武市半平太の下獄などに憤激し、従兄弟と脱藩して亀山社中に入った。

従兄弟の一人は、途中国境を越えられず自刃している。後に板垣退助と自由民権運動を見展開する。

▼高杉晋作、長州藩士。長州がフランス艦隊と下関で争って敗れた後に奇兵隊を設立。

その後、脱藩して倒幕運動を推進する。竜馬と下関の海戦で共闘するも、大政奉還を見

届けることなく病死。

▼西郷吉之助（隆盛）、薩摩藩士。公武合体派であった藩論を、竜馬や桂たちと協力して倒幕に転換させ、大政奉還の立役者となる。

竜馬の私心無きを気に入り、早くから意気投合する。

▼沢村惣之丞、おいしい逸材だったらしいが、警護中、不運にも過って薩摩の士を射殺してしまった。

「薩摩／土佐連合に恨み残すまじ」と唱え、新しい連合の未来を夢見て26歳の若さで腹自殺している。

▼溝淵広之丞、後藤と一緒にいるところを、竜馬の海援隊から切られそうになった。

溝淵は、犯人を知っていたが、しゃべらなかつた。それが竜馬と後藤のために、といういごっそう（異骨相）であつた。

新政府から何度かお召しがあつたが、断り続け、閑居のうちに没した。

そんな一徹の志士もいた。

もし、当時の若者たちが竜馬に会えずにいたら、そして竜馬の熱い思いを斜（ハス）に構えて全身で受け止めていなかったら、さらに、国力がまとまらずに分散していたら、明治維新は成就せず、新興国日本の船出はどうなっていたか分からない。

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 青山 猛 (あおやま たけし)

- 1940年 茨城県生まれ。  
1963年 明治大学卒業。  
同年 富士電機株式会社入社。  
1999年 同退社。  
現在 (株)日鉄エレックス営業本部顧問。  
(株)社会環境システム研究所専務理事。  
情報通信関連ベンチャー「(株)ココリンク」顧問。  
環境関連ベンチャー「(株)ニスコム」役員。  
NPO「リサイクルソリューション」会員。  
元、国土交通省外郭団体「アーバンインフラ・テクノロジー推進会議」主査。  
現、NPO「みんなでまちづくり」会員。

## 第二の黒船襲来 負けるな、諸君！

---

2005年2月15日 電子出版発行

著者 青山 猛  
発行者 瓜谷 網延  
発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (営業)

<http://www.boon-gate.com>

© Takeshi Aoyama 2005 Corded in Japan

ISBN4-8355-8499-6 C0095

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」  
サイト <http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 05.01.27 Y.H.